

会報二月号 易経から学ぶ 序卦伝【上経】1/2

易経は、天地の道理を示し、それを手本として人間の道を立てたものである。本文（経）と、解説（伝）からなる。中身の詳細は勉強会に譲るとして、今月二回と来月二回の計四回で、伝のうちの一つである「序卦伝」で、六十四卦の順序（今月は上経の三十卦）を確認し、天地自然の道（性質と働き）と、人間の世に処する原理原則を留めたい。

易経は、逆境に陥ったり困難に直面するとすぐに心が弱くなる人に対して、「腐った面してんじゃねえ！」「情けない言葉は二度と吐くな！」：つまり、屈するな、諦めるな、そこで終わるな、新たな道に進め、と説く。また、順境や得意の絶頂に居るとすぐに心が傲慢になったり油断したりする人に対しては、度を超えるな、自分を戒めろ、努力を続けろ、と。またまた、天邪鬼や無感動な人に対しては、喜心・感謝・陰徳を忘れるな、誠心を通わせて、協力一致して楽しくやれ、豊かになれと説く。

易経を学ぶと、弱気、甘え、傲慢、油断、天邪鬼等、そういう浅はかな心が本当に恥ずかしくなる。それは万物を生成化育してきた天地の心とは似ても似つかないから。人の生は月の満ち欠けのようなもの。満つる時があれば欠ける時もある。自分を遅しく柔らかくして皆で協力して楽しく豊かに。天地の性質・働きを手本として人の道を立てろ。そう易経は説く。勿論、乱れた世の中では常道ばかりでは通らないので、時に応じて変道を以て処し貞正を保っていくことも必要である。

自分を統べる者、家族を統べる者、組織を統べる者が、易経を知らない、天地の心を知らないというのは、本当に勿体ない。

まずは、今回と次回の三十卦と三十四卦、その意味と繋がり（順番）を覚えてくれると、ここを共通の土台として進める。大雑把に言えば、卦の流れ（順番）は、陰陽盛衰が交互にくる。

目次

・上経（一〜十五）

●易経（序卦伝）【上経】主に天地自然の性質と働きと流れを説く。

○、始まりは、全ての可能性を秘めたものであり、それを【太極（たいきょく）】と称する。それが二つに分かれて一つは上がって天となり【乾为天（けんいてん）】、もう一つは下がって地となる【坤为地（こんいち）】。

一、【乾为天（けんいてん）】

乾とは本来「上がる」という意味である。どこまでも上にあるもの、それは天を表す。天の働きは、滞ったり狂ったりせず、尽きることなく万物を養い、万物の本性を成し、成して復た始まる。そこから「健やか」「剛（つよ）い」「疲れない」という意味も持つ。これを「元亨利貞（げんこうりてい）」という四つの徳目で説明する。

●元とは、①始まって出るところ。大元（おおもと）。②大きいもの。③首（かしら）。

全てを覆い包容し、すべてを養っている。上から光を当てて照らし温め、そして養う。全てのものは天の庇護（かばい守ること）なしには存在できない。この性質・働きは、人間に当てはめれば「仁」である。仁とは、他者に温かく接することであり、包容して養っていく徳（器量と機鋒）である。季節で言えば春である。

●亨とは、①何処までも行き渡る。②変わらない。③伸びる所まで伸びて達する、伸びて通ずる。人間に当てはめれば「義」である。義はコロコロと変えるものではなく、どこまでも貫き通していくものである。季節で言えば夏である。

●利とは、あらゆるものを包容し、養い育てその本性を伸ばしていき、宜しきを得ることである。人間に当てはめれば「礼」である。礼とは、私の誠心と相手の誠心を通い合わせることである。礼が秩序や統一、そして変化と調和を生み出して宜しきを得る。利益、財産、地位等の形、その根本は礼である。季節で言えば秋である。

●貞とは、①正しく固い。②そのものらしくしっかりと出来上がる。③正しく定まって動かない、狂わないこと。各々その性分のところをしっかりと、その性分通りに成せば、それが正しいのであり、そのまま固まるのが貞である。人間で言えば「智」である。私たちが物事を通すためには、通すためのやり方や秩序が必要であり、それが定まっていることが大切である。物事が滞ったり行き詰ったりせず、進められることが智である。季節で言えば、その本性を固く守っている冬である。

二、【坤为地（こんいち）】

これは地の徳を表している。地は天と相対するものであり、いつも天の下にあって落ち着いて動かない。その動かないところに万物を生成化育させていく原動力がある。安らかにして貞であること（定まった道を固く守り、妄に変わらないこと。一定の方針と目的があること）こそが、地の本領である。

天地は両者相俟って（お互いを必要としながら）、無限の生成化育の働きを遂げていく。

この天地の性質と働きを手本として、人の道を立てる。例えば夫婦の場合を言えば、夫たる者は先立ち、妻はこれを輔けて始めて夫婦を成す。上に立つ者の苦勞を知り、

またこれを輔ける者の苦勞もまた大切なものである。天地が黙々として互いに相俟ち相助けて万物を長養していくことを手本とするならば、人々も自らを敬し学問道徳を修め、自らの本性と責任を果たしていくことに力を打ち込まなければならぬ。そうでなければ、自らの存在意義を全うすることもできず、また他者に累を及ぼす(迷惑や負担をかける)ことになる。自らの境遇で自らを全うし、お互いに相敬し相親しむことがなければ、何事も健全に発達することはできない。

光・熱・明というエネルギーを絶え間なく発していくという天(太陽)の道を、地(地球)は受けて、様々な理を以て万物を生化育させていく。この天の道と地の理を合わせて「道理」と言う。天の力(道)と地の力(理)は、相交わり相助け、天地の間に万物万象を生じさせてきた。生成化育とは、新たな道に「変」じて、新たな形あるものに「化」していくという「変化」である。

天地の間に万物は満ち、そして育っていくことによって、それを生み出した天地の意義と、万物それぞれの意義が全うされる。

人間も天地の間で生成化育してきた。天地を敬い、自らを省みて繁昌(活気に富み、盛んなこと)していく所に道があり、楽しみがある。

次からの【三、水雷屯】〜【六十四、火水未済】は、【一、乾为天】と【二、坤为地】が発展したものであり、換言すれば【一、乾为天】と【二、坤为地】は、【三、水雷屯】〜【六十四、火水未済】までを凝縮したものである。

陽の働き(分化・発現：外へのベクトル)を代表するものとして天を置き、陰の働き(統一・潜蔵・調和・秩序・形：内へのベクトル)を代表するものとして地を置く。陰陽は相俟って中(その時の宜しき形とする)となす。陰そのものの中にも陽の性質を含み、陽そのものの中にも陰の性質を含む。陰陽お互いが同調するためである。従って、天と地も必ずセットでその働き(万物万象の生成化育)を為す。

天を知り地を知ること。天の道と地の理、即ち、道理を知ること、それを手本として人の道を立てる。天地(父母)の心を第一として心身を修める。これが道徳の道である。

三、【水雷屯(すいらいちゅん)】

その天地の働きが形に現れる一番初めの状態を示すもの。将に現れようとして、未だ満足に現れていない状態であるが、ここにも元亨利貞が現れている。

雷が天上に鳴り渡らず、水の中に潜んでいる状態。滞る(動くべくして動けない様子)それが【水雷屯(すいらいちゅん)】である。屯とは動く、集まる、悩むである。万物は始まりにおいて、動き悩む状態の中から種々の発展の道が開けてくる。苦しい中を耐え悩みの中をしっかりと通っていくことによって、あらゆる発展の土台が固められ、天地の間は万物で盈ちていく。物事の始め方の道とは、まず元亨利貞

(仁義礼智)を立て、上下と広く親しんで己を養っていくことである。

しかし、生じるだけ、始めるだけでは、まだ物の存在の甲斐はない。万物がそれぞれ発達して、その本性(協力一致して進歩発展すること)を全うしていくことで、天地も万物を生じさせた甲斐があるというものである。何か一つ考えを持ち、氣力を養って成すところが無ければ駄目である。

産みの苦しみの時であるから、軽挙妄動では通らない。不拔の志を立てて慎重丁寧にいけば通る。通るとはつまり、次の【山水蒙(さんすいもう)】へ進むことができるということ。

四、【山水蒙(さんすいもう)】

万物が生じた時は幼稚・未熟・智恵に暗い状態である。幼く混沌、それが【山水蒙(さんすいもう)】である。蒙とは幼い子供の状態であり混沌としていて整っていない状態である。未だ知恵が中に含んで外部に現れていない幼く整っていない状態である。幼稚なままではいけない。自立心を養い自分より長ずる者について物事を学び、大いに伸びるのを待たなければならぬ。或ることを始めようとする場合、子供の素直な心持でなければならぬので、始めから大いに伸びようとしても駄目である。また、できるだけ多くの人について教えを受けて力を養っていくことが大切。

教えというものは習う人の心持次第であるので、真摯な心持のない人に教えてもほとんど効果はない。

五、【水天需(すいてんじゅ)】

天上に水が昇って雲となった象である。雲は益々深くなって地上の万物を潤す雨を降らせることになり、万物はひたすらこの雨を待っている。

幼いものは養わなければいけない。養い発達していくには自ら順序があり、時を要する。心身を養って整えていくには、まず飲食を以て体を養うことで段々と成長発達してくる。まず飲食で養う、それが【水天需(すいてんじゅ)】である。需とは「求める」であり、養う道、飲食の道である。飲食は必ず必要なものであるから、皆が求めるものである。焦ってはいけない。

天地(乾坤)の後に、【水雷屯】【山水蒙】【水天需】と出てくるのはそれだけの意味がある。このように底力を強くするということに意を用いなければ、一個人も家も事業も国も、本当に発展することは難しい。誠実なる努力を重ねて時を待つ。これが【水天需】である。心の力と体の力を打ち込んで少しも緩まぬという誠実さが仕事に乗り移ってこそ初めて大きな力を備わる。もし、怠慢さがあって誠意がなければ、自然にお互いに自分のことばかり考えるようになるから、協力一致ではなく離反していくようになる。

それには貞が大切である。貞は一つのことを守って心を外に移さないことである。苦しいから止める、時間がかかるから辛抱できなくて止めるというのではない。

どんなに時がかかっても、しかるべき時機が来るまでは努めて怠らず、急がず焦らずして時を待つ心持が必要である。これが貞である。ただ時を待つのではない。静かに実力を養っているのである。

六、【天水訟（てんすいしょう）】

易経は、力あるものが上にいて力ないものが下にいるというような気分ではいけないと説く。力あるものは自分の力を当てにするのでなく人に下るようにし、力ないものは力がないからと言って自らを軽んじていると、遂には自暴自棄になるから良くない。何とか努力してその力を養うように努めなくてはいけないと教える。従って、天が上で水が下にあるのは自然のようだが、人にあるはそれではいけない。天の如く上にある者は下を軽んじる考えを捨てて、いつでも自ら下り下の者の価値を認め、下にある者は天に屈するだけでは駄目で、どうかして発展向上を志して、上にある者を輔ける気概がなければいけない。然るに、天は上にあり、水は下にあるだけでは相俟ち相助けるのではなく、相剋（お互いに勝とうとして争う）することになる。

つまり、飲食の生活にだけ意を用いるようになると、人間の欲望はどこまでも増長していくので、お互いの欲望がぶつかり始める。求める所があれば必ず争いが出てくる。欲望がぶつかったの争い、それが【天水訟（てんすいしょう）】である。訟とは、互いに談じて争う。裁判を仰ぐことである。欲望が大きければ、それだけ争いも大きくなっていく。

しかし、それではいけない。己の立場をよく考え、人の立場もよく考えて、単なる勝ち負けを離れて物事を真面目に考えるようにすることが大切である。どこまでも争って勝ち負けをつけようとしては通らない。力ある者が力で通せば人に背かれる。力ない人が力あるものを妬むなら発展向上に向かわない。そもそも勝つということは人間の目的ではない。自然の道を尽くしていけば、正しい者はいい結果を得る。自分の我を張ってはいけない。

誠心誠意が大切であり、勝れた人の意見を重んじることが大切であり、我を張らないことが大切である。

もし争うならば、争う理由が尤もだと皆が信用する所があれば訟を起こして宜しい。過失は改め、道を守って正しき所に安んじることが肝要である。

七、【地水師（ちすいし）】

争いが大きくなると、お互いに大きな害を受けるから、その愚かさに気付いたならば、その争いを解決すべき道を立てなければならぬ。この争いを挫いて調和を築くためには、時に戦うことも必要である。それは大勢の力による誠を以てする戦いである。言い換えれば、人間の「お互いに助け合う」という本性（本来の性質）に戻るためである。

小が集まって大をなし、これが外に向かって発展していく、これが【地水師（ちす

いし)】である。師とは、「諸々(大勢の人)」であり、「戦って勝ちを制する」という意味である。争いを止めるために戦うのである。二つの戈(ほこ)を止めるという「武」の意義とも一致する。

そもそも、戦いというものは、強者が弱者を圧迫することであってはならない。不正な(共栄を図らない)者を懲らしめて反省を促し、その不正の跡を絶つことが戦いの目的であり、平和・調和を来たすことが大勢の人が力を合わせる目的である。また、目的を成就した後は、戦いの相手には喪に服するの礼を以て処していく。

世の中には、大勢の力を以て不正を行うこともあるが、それが長く続くならばその国は必ず疲弊する。戦って正(生成化育の道)を全うすることが大切である。しかし、もつと根本的なことを言えば、勝つことは人間の目的ではない。それよりも正しく(元亨利貞をどこまでも体現して)生きることである。天地の心(性質・働き)に倣い、自分の本性を尽くし、広く多くの人と親しんで生きることが肝要である。自然の道を尽くしていけば、正しい者は良い結果を得る。

八、【水地比(すいちひ)】

大勢が集まれば【地水師】、そこには親しみ合い睦み合う気分を作っていくことが大切である。親しみ合う、それが【水地比(すいちひ)】である。比とは密なりで、物と物との間に隙間がなく密着している状態を言う。つまり、比は親しみ合うこと、お互いに手を引いて倒れないように助け合うことである。

多くの人が親しむには、その中に必ず中心となるべき者が居ないとできないことである。世間の多くの親しみは利による場合が多いが、親しむということは、道徳により、その人の徳を慕い、その人の指導を頼み、楽しみとして集まり親しむのが本来である。中心となる人は努力を怠ってはならないし、集まってくる者も一旦立てた主義方針は貫いていく心掛けがなくてはならない。こういう親しみに素直に飛び込むことができず、遅れるようではいけない。

人間は、どれほど優れた知恵を持っていても、孤立しては大きな働きはできないから、お互いに親しみ合うことが、一人一人その存在意義を全うするための道である。従って、事に際しては、協力一致して各々が力を尽くすことが肝要である。協力一致するとは、各自が怠らずにその責任を果たすことであり、他者の価値を認め、努力に対して感謝することである。熱心、努力、感謝がなければ、どんな仕事も発達しない。完璧で万能な人間はいないから、自分の長所に力を打ち込み、自分の足りないところは他人の努力によってこれを補っていく。

九、【風天小畜(ふうてんしょうちく)】

このように、皆が尊重し合ってそれぞれの責務を果たし、協力一致して仕事に力を尽くせば、「蓄える所有り」で、その生活にも余力が出来てくる。余力と言うものは、次の発展のための蓄積となる。少しずつ蓄積していくこと、それが【風天小畜(ふう

てんしょうちく)】である。畜とは育・養で、育って段々とそのものを善ならしむる意、そのものの美なる所を育てていくこと、少しずつ蓄えて大を成すという意味である。

どんなものでも初めから大きく発展する事は無いので、小さいことを侮らず、少しずつ積み重ねていけば結局大きくなるという理であり、そのためには志と誠、弛まない努力が必要である。

十、【天沢履(てんたくり)】

しかし、人間生活は、物が蓄えられて豊かになればそれで良いというものでもない。養うべきは飲食だけでなく、道徳も必須である。悪い(通らない)方の一事をやめて、善き(通る)方へ、これを導いて道徳を履み行うこと、つまり礼を重んじることである。礼を重んじるとは、上下の秩序を重んじることである。これが立っていれば、どういう間違いがあっても、また常に復することができるのである。礼を踏み行っていくこと、それが【天沢履(てんたくり)】である。履とは踏み行うこと。踏み行うには必ず礼儀を以てする。上下の区別を明らかにするのも礼である。親しき仲にも礼がある。それぞれが止まるべき所に止(定)まることで、安らかにもなり、お互いが心を通い合わせることができる。

道徳を以て相親しむこと、それを形にしたものが礼儀である。お互いに分を守り、相手を尊重し、敬い合うことが、「礼」の成り立つ根本となる。

お互いの協力一致には、「秩序」と「統一」が必要であり、秩序を備えるにはお互い譲り合い、認め合うことが大切である。そのため、生活を意義あるものにしていくなら、必ず礼(秩序/統一)が必要となる。

十一、【地天泰(ちてんたい)】

礼が形骸化してしまつたら元も子もない。形骸化したものほど精神を腐敗させていくものはない。

しかし、下の者は進んで上の者を輔け、上の者は低い所まで降りてきて皆の気持ちを察し、皆の価値を重んじることではじめて協力一致の実が挙がる。

お互いに察し合い助け合う心持ちで喜びも憂いも共に分かち合い、お互いの心が通い合っていくこと、これが【地天泰(ちてんたい)】であり、世の中を安らかにさせる根本である。泰とは「滑らか」であり、「通ずる」ことであり、ものが皆、然るべきところに安んじている状態である。

何事も「通る・通じ合う」ことが大切で、「通らない・通じ合わない」というものは改めるべきである。

ただ、人間は通じ合い安楽になると必ず気が緩み驕りが出て贅沢にもなつて、飲食衣服住居ともに「過ぎる」ようになってくる。そこから、泰は「過ぎる」という意味も含んでいる。

十二、【天地否（てんちひ）】

過ぎると書いて過ちと読むように、過ぎれば必ず乱れてくる。安楽に人が溺れば、当然乱れ、障りが多くなって人と人との心も通じ合わなくなってくる。通じない、これが【天地否（てんちひ）】である。否とは、塞がること、上下相通じないこと、背き合うことを言う。しかし、背き合うことは人間の本性ではない。助け合っていくことが本性である。

世の中は始終変化するものであり、安らかな時に危ういこと、盛んな時に衰えることを思い、心を戒めて備えなければいけない。それを怠り、馴れ合ったまましていると、礼を失い、乱れ始め、上下の意思疎通が上手くいかなくなって争いが起こる。

十三、【天火同人（てんかどうじん）】

お互いの意思疎通が上手くいかない、心が通い合わない等、陰陽相隔絶すれば万物生ずる道理はない。人間も上下の情が反対を向いて相通じなければ天下も治まらない。しかし、お互い通じないまままで終わってはならない。

そこで、人々が「これではダメだ」と気付けば、反省しお互いに戒め合い、成すべきことに全力で打ち込んで、否運の時代を打破してよい時代を作ろうと、皆が心を同じくして各々が力を尽くし、協力して事に当たるようになる。これが【天火同人（てんかどうじん）】である。同人とは、人の心を同じうするという意味である。そのためには各自が「私利私欲」を捨てなければならぬ。私心に囚われていては和することはできない。各々が長ずるところを伸ばして和合一致すれば、これより強いものはない。

何処に在る人間でも、生まれの前後の区別があるだけで同じく皆「天の気を受けて地から生まれた」人間である。であれば、皆天地を父母とするのであって、世界皆兄弟同様である。相親しみ、相助け、相救うのが人間の道である。

天地人三才みな是れ一様である。

十四、【火天大有（かてんたいゆう）】

このように、人々がお互いつまらない私利私欲を捨てて進めばよい。人に親しむ所が多ければ、大なるもの（賢人豪傑）が多くなり、様々に事業が興り富んでくる。これが【火天大有（かてんたいゆう）】である。大有とは、無い物が種々多く出てくることであり、大いに物が我に帰して来るようになるということである。それは、家も国も盛んになり、生活の内容も充実して発展の機運が動くことである。

十五、【地山謙（ちざんけん）】

しかし、「盈（み）つれば欠ける」という道理の通り、これを極めてはいけない。富めれば富める程、我が身を小さくし、人の下に降ること、謙虚であることが大切に

なる。

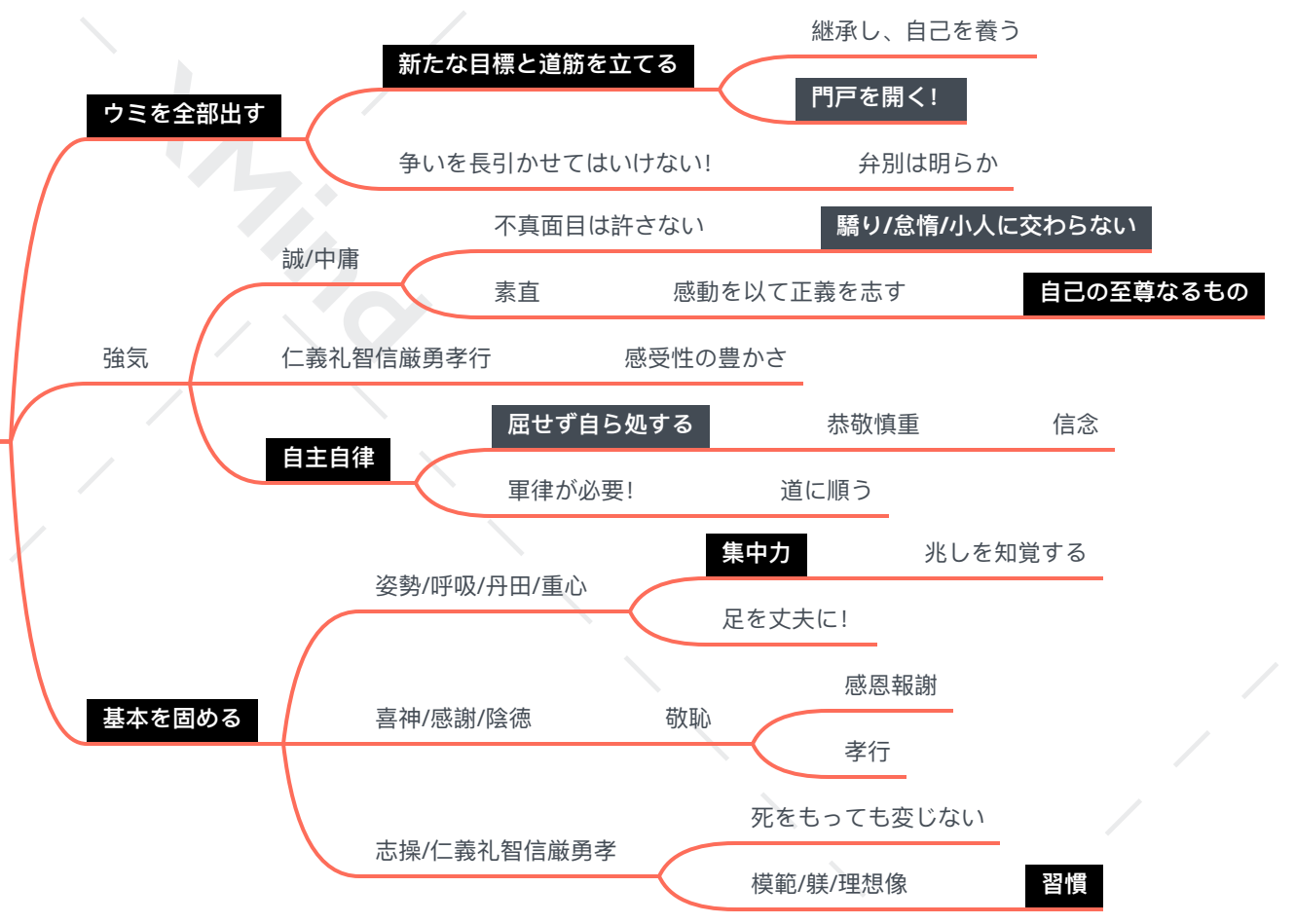
つまり、盛んな時代に用心すべきは、成功に驕って油断してしまうことである。安心という気分が兆すと気が緩み、衰退失敗を招く。そこで、どこまでも驕ることを制し油断しないように戒めていかなければならない。そこで、自らを振り返り足れりとしないう心、他人を重んじる心が必要である。自省し他人を重んじる、それが【地山謙（ちざんけん）】である。謙とは小である。我が身を小さくして人の下に降っていること。小さいものだから一つでは足りない。いくつも合わせる必要があるから「兼ねる」義も生まれる。また、「謙する」とは、自らの長所を忘れることである。自ら足れりとならないで絶えず収容に努めることで自然と謙たりうる。そういう心持であれば、事を為すときは必ず大勢の助けを得てよい結果が生まれやすい。

人の心は常に動くから、気付かないうちに変わっていくので注意しなければならぬ。常に反省する心掛けがあれば「終わり有り」で躓くことはない。隆盛は皆のお陰であるとして感謝し、自らの力は微力であるとの自覚が、お互いに喜び栄えることの根本となる。喜心・感謝・陰徳を忘れてはならない。

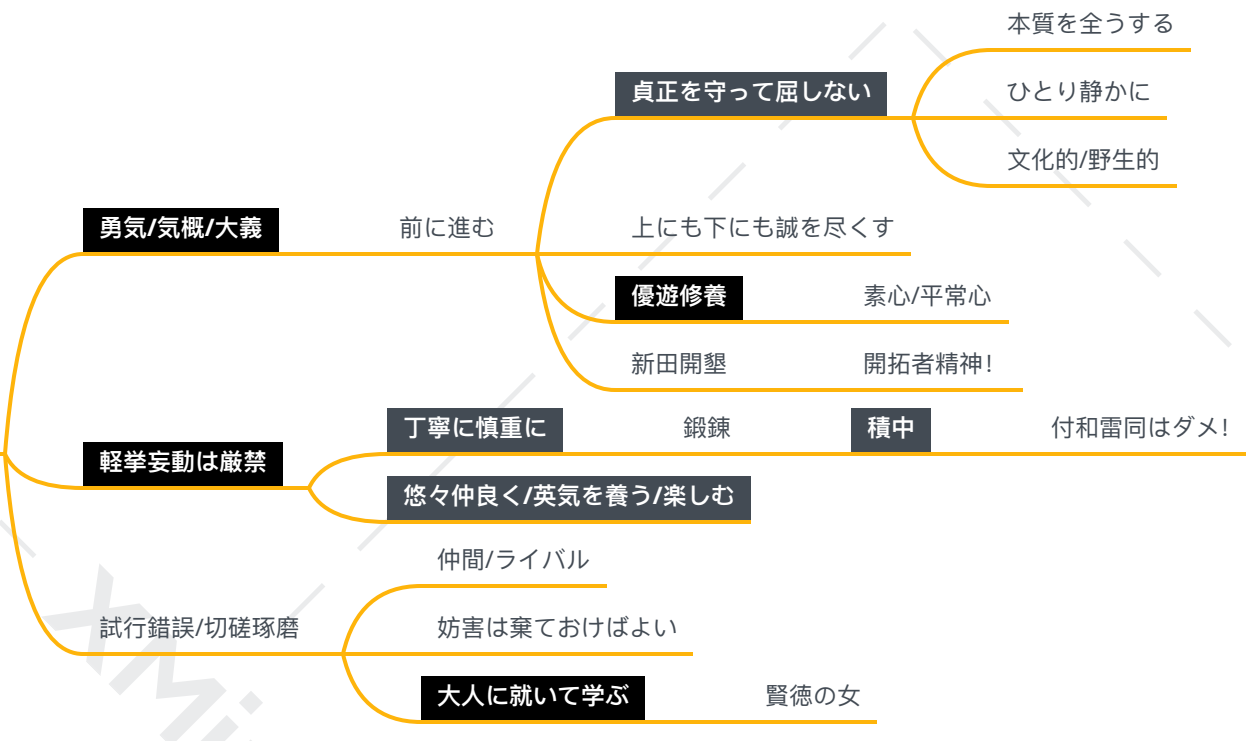
易经1. (展開)

1~3 内面的/準備的段階

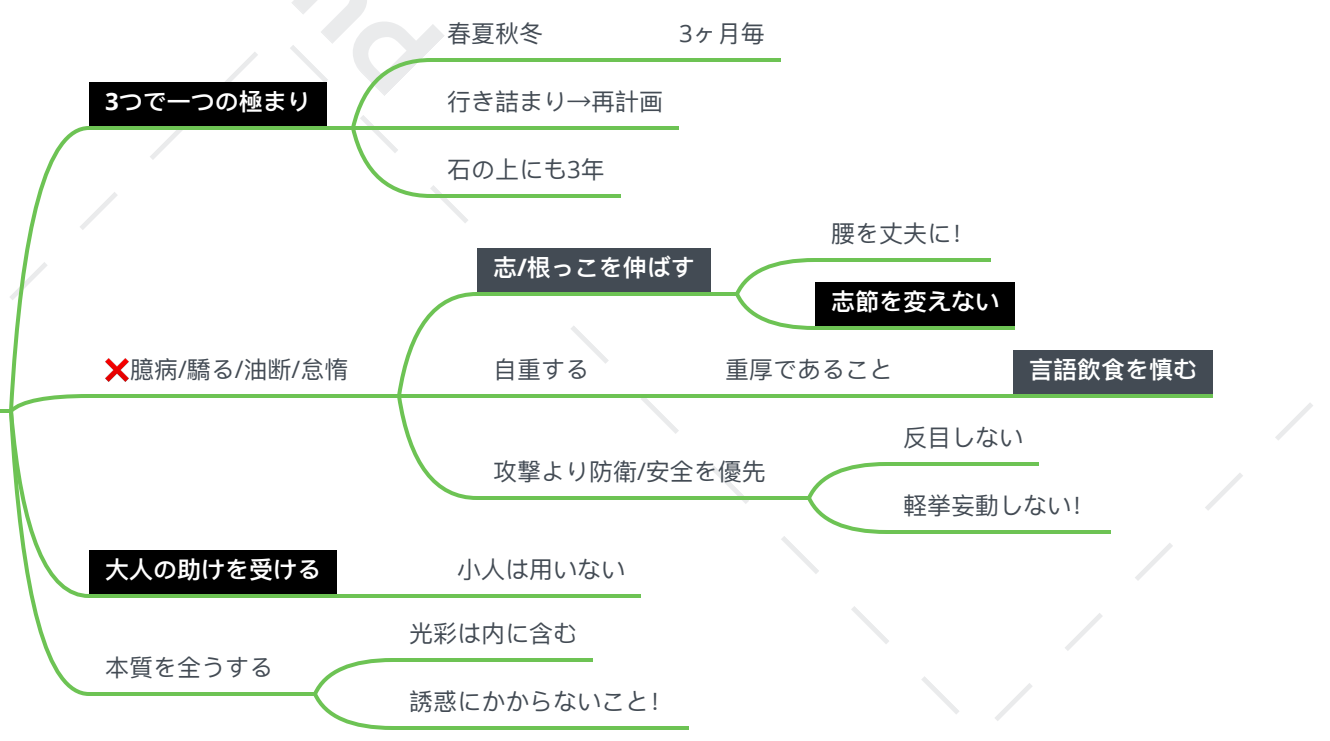
1.本を立て志を定める



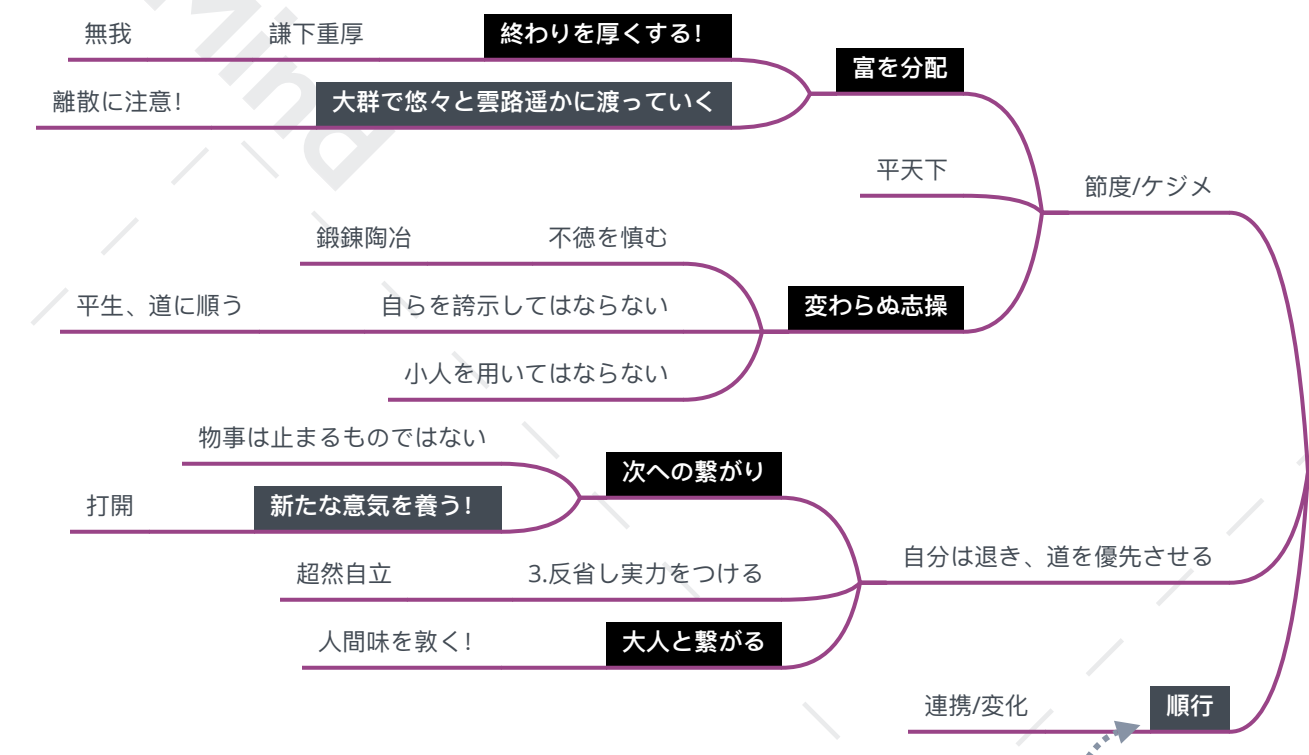
2.誠をもって鍛錬/苦心努力



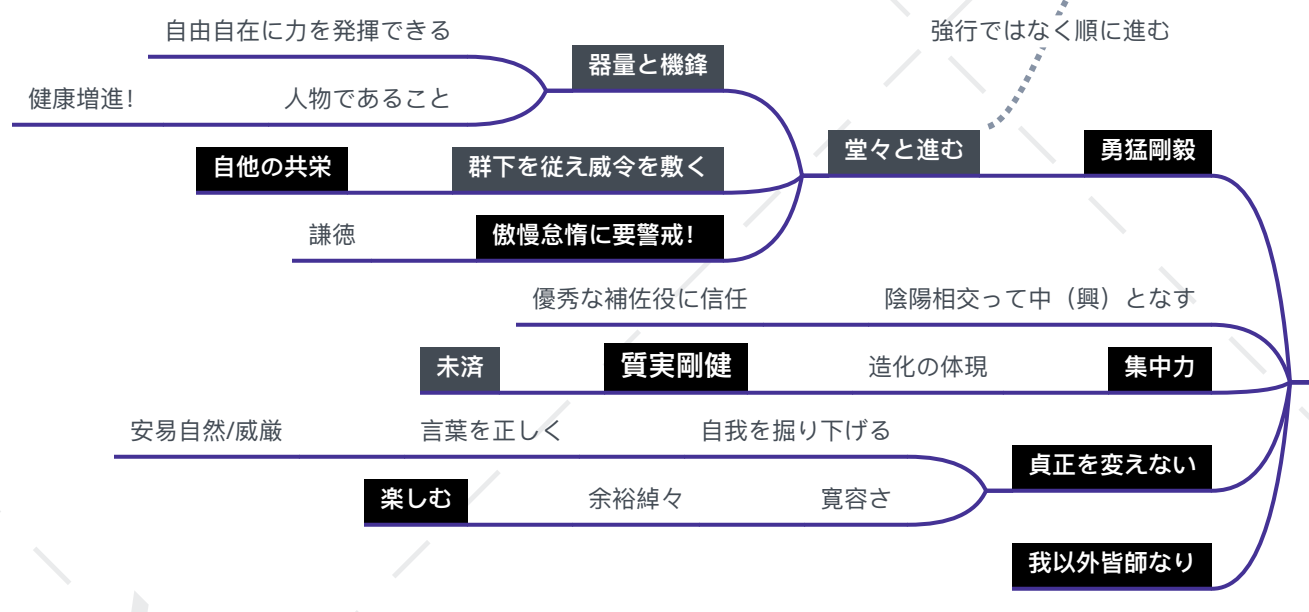
3.反省し実力をつける



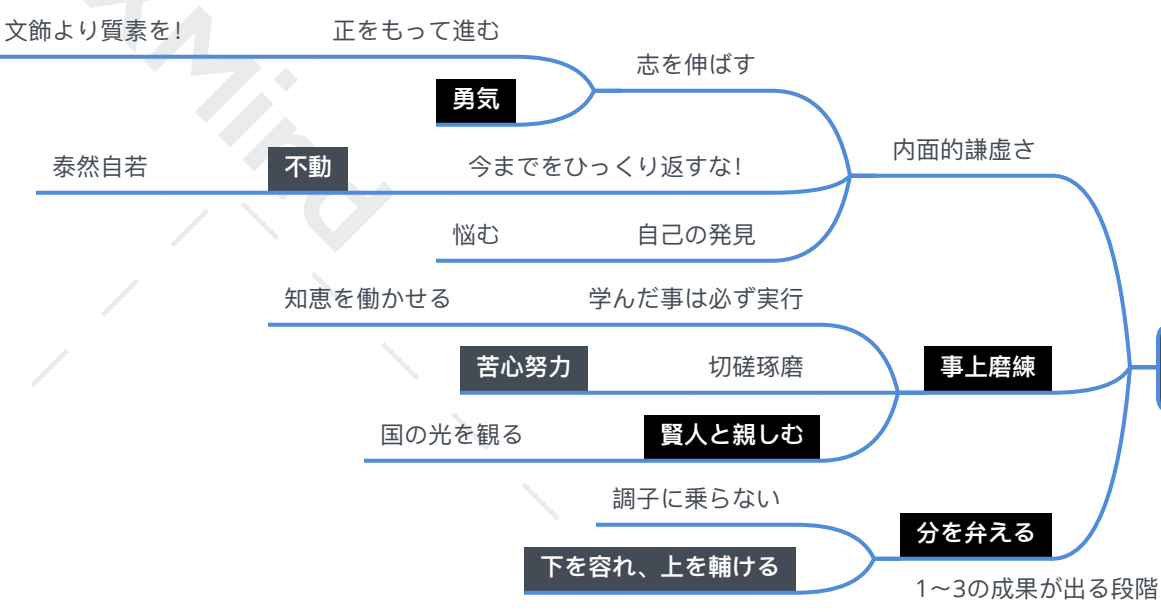
6.謙虚/誠



5.力の発揮



4.初心に帰り奮闘努力



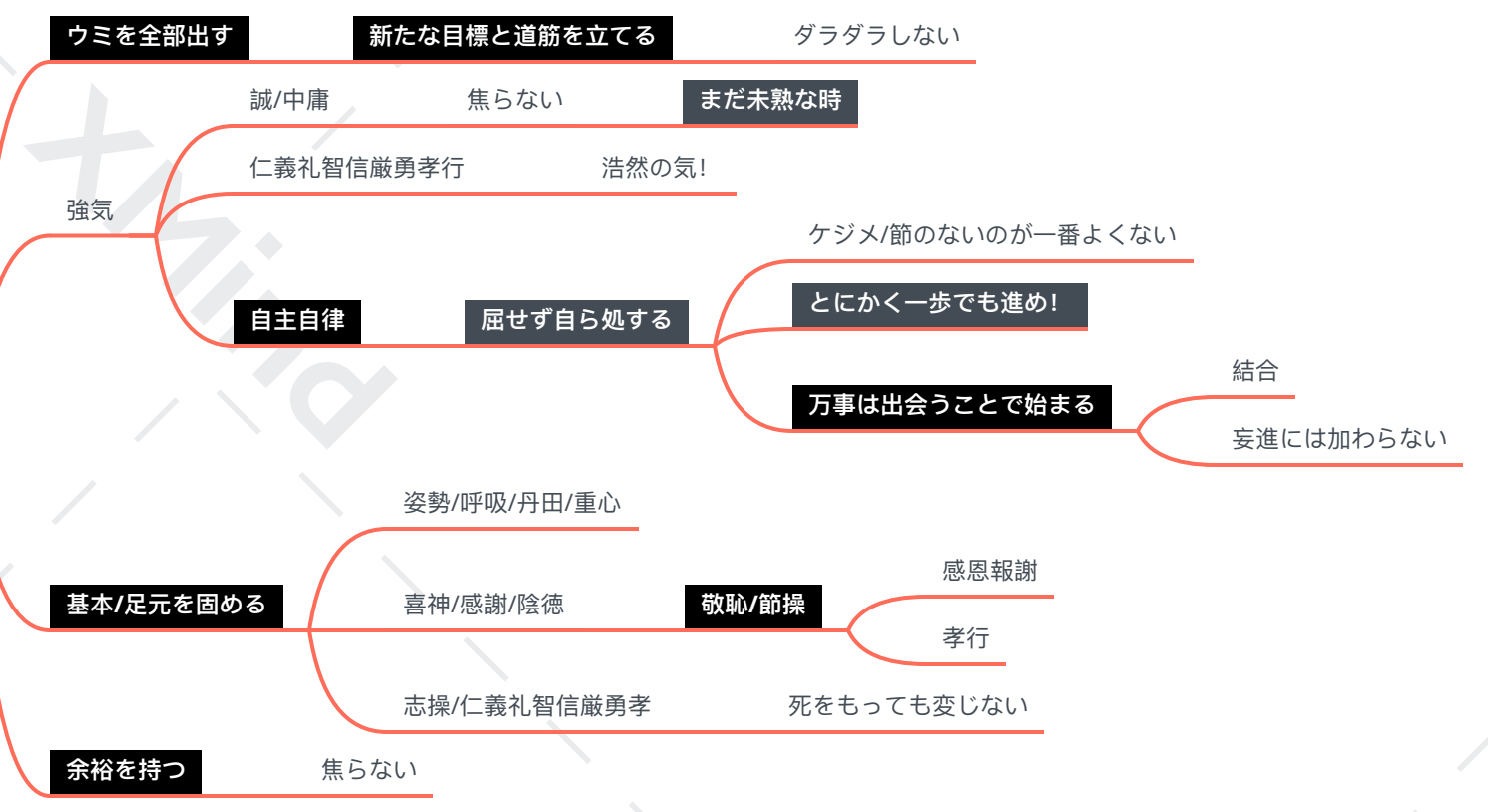
4~6 社会的/活動段階

1~3の成果が出る段階

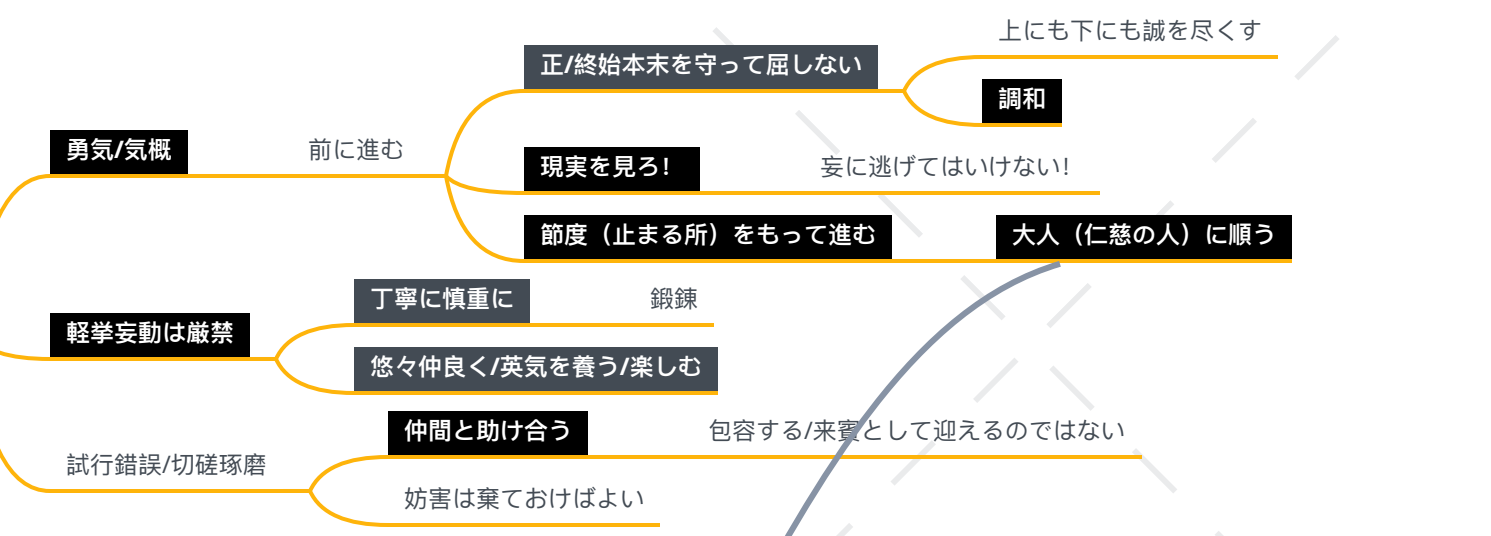
人間社会の実態に適応する発展の道

易经2. (成長)

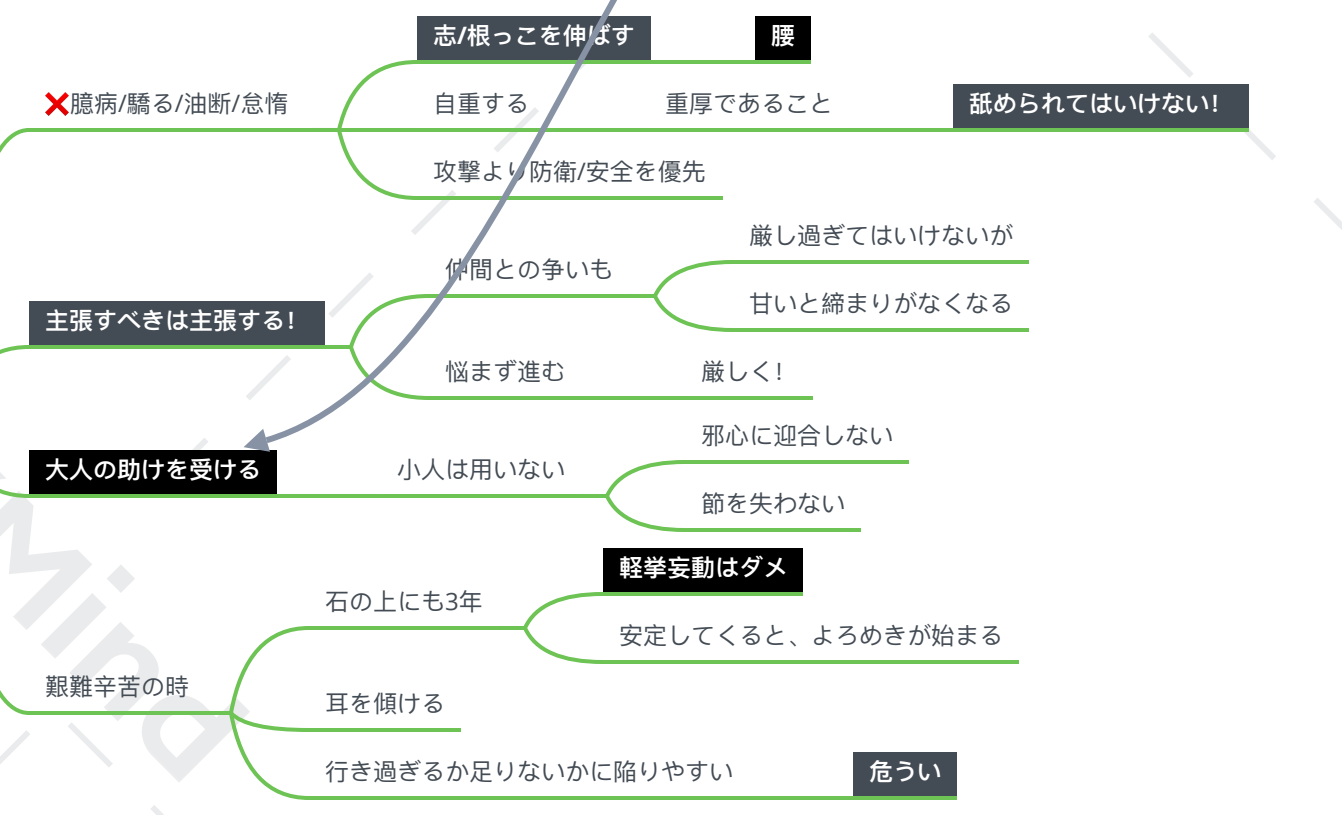
1. 自反と、新たな出会い



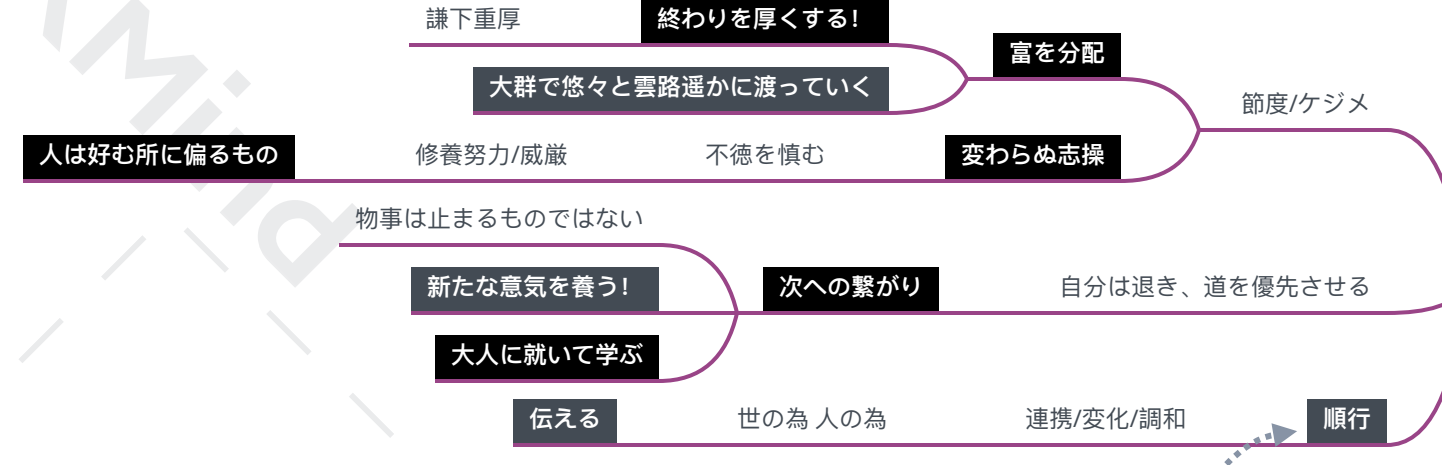
2. 節を持って中正に進む



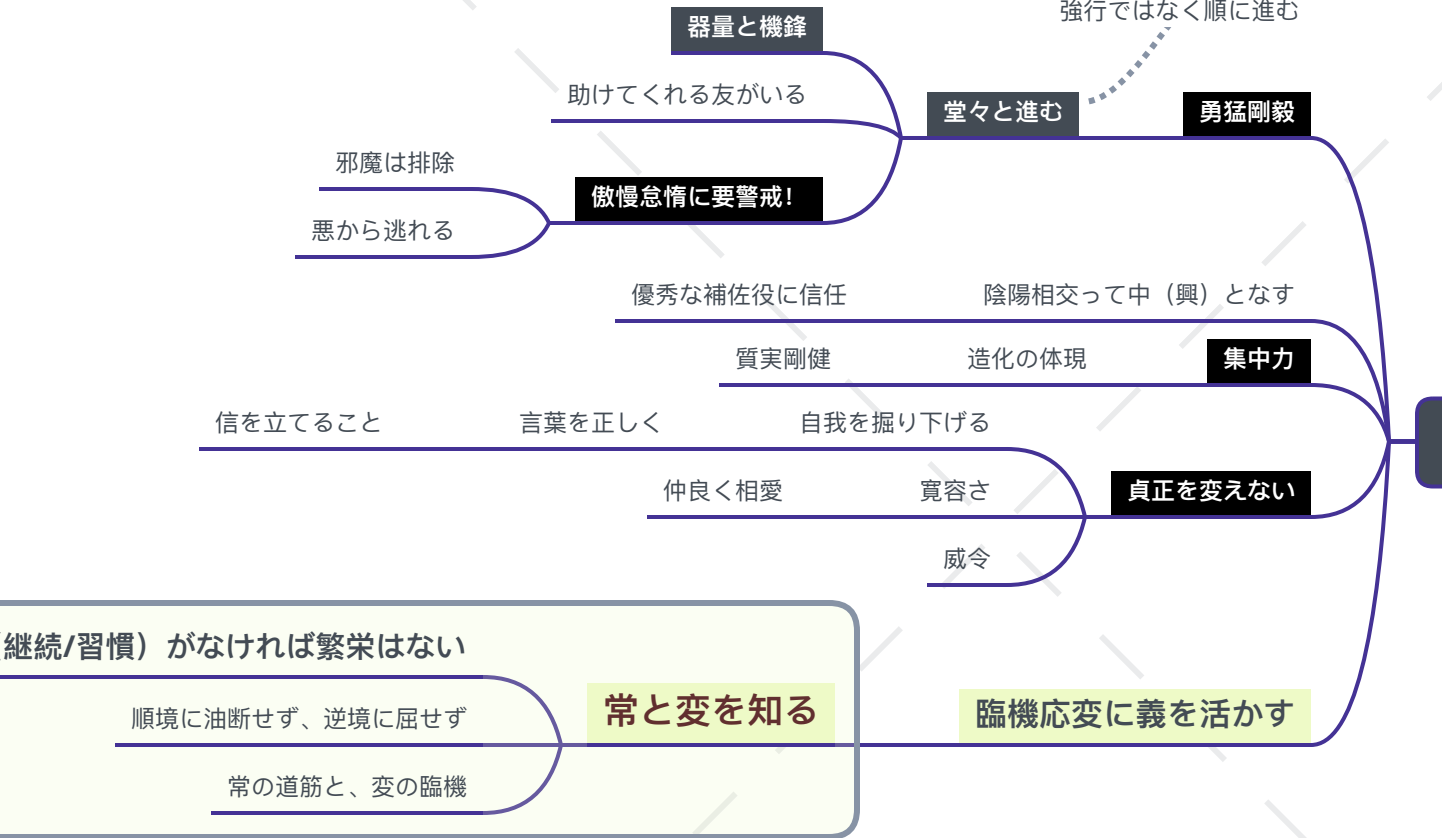
3. 軽挙妄動せず、信念に精進する



6. 志/節を全うし、後進に伝える



5. 道(不変/継続/無私)に身体を張る



4. 野心ではなく信念を貫く。同志が集う

